



COSSS report

Chuetsu Organization for Safe and Secure Society.

公益社団法人 中越防災安全推進機構 機関紙

2013 夏

VOL. 4

地域での歩みを広げ、未来へとつなぐ



ー全国植樹祭 プレイベントー

contents

特集① P2-3

「中越大震災 10 周年 ～その先にあるものは～」
復興の歩みとこれからを考える

特集② P4-5

「中越市民防災安全大学と市民安全ネットワーク」

【シリーズ】 P 6 「人と人」高橋 要・小林 正利

【COSSS リレーエッセイ】「勇気くじき」と「エンパワーメント」地域防災力センター チーフコーディネーター 河内 毅

【連載】コラム・視点防災 【その他】インフォメーション、施設のご案内、会員募集

災十周年

あるものは～

あるものは～」と題して連載を開始する。

地の未来を考えていく機会としたい。



やまこし復興交流館に整備される
プロジェクションマッピング

二〇一四年とは、
どんな年なのか。

新潟県中越大地震から九年の歳月が流れようとしている。
中越大地震の発生は平成十六（二〇〇四）年十月二十三日だが、同年の七月十三日には「七・一三水害」として語り継がれている大水害に見舞われている。記録的な豪雨により、信濃川に流れ込む中越地域の支川は各地で氾濫し、地域一帯は泥の海と化した。水害・震災の被害からの傷も癒えない仮設住宅暮らしの住民を、今度は豪雪が襲う。平成十七年・十八年と連続した豪雪は、震災で弱った家屋を次々と倒壊させ、仮設住宅の屋根にも重くのしかかった。加えて、平成十九年七月十六日には中越沖地震に見舞われ、中越大地震と二重被災となった地域も広範囲に及んでいる。
平成二十六（二〇一四）年を俯瞰すると、大災害発生からの節目の年にあたる。新潟国体の直後、新潟県・山形県を中心に被害が九県にも及んだ「新潟地震」から五十年目にあたる。地震発生から十五分後には、日本海側沿岸を津

【新潟県は中越大地震から10年を迎えるー 2014年への視点】

2014年は中越大地震10周年の節目の年

2004年の被災から10年目の節目を迎え、被災地の復興状況とともに、中越の教訓や発見、新潟モデル等を、全国や次世代に向けて発信することが期待されている。

2014年

2014年は様々な災害のメモリアル・イヤー
・新潟地震50周年等県内多くの災害でも節目の年。防災教育プログラムの開始もあって、県民の防災や安全・安心への関心が高まることが予想される。

2014年は新潟県が全国から注目される年
・全国植樹祭、JR地域キャンペーン、全国新聞大会、北陸新幹線開業等全国に発信される機会が増え、新潟への注目や来訪者が拡大する。

「防災・減災・復興」を中心に、全国から新潟県への注目が高まる2014年。

【2014年前後の動向】



波が襲い、県都・新潟市の信濃川沿いの低地帯に浸水被害をもたらしている。また、低湿地帯から砂と水を噴き出す液状化現象により、新潟市では鉄筋コンクリート四階建のアパートがそのまま傾いて倒れるなどの被害が発生した。あの新潟地震から五十年、日本海側の津波被害の「教訓」は語り継がれてきたのだろうか。私たちは、幾多の大災害を「記憶」の外に追い出してはいないだろうか。今一度、それぞれの災害を思い起す必要があるのではないだろうか。

中越大震

～その先にお

今号より、「中越大震災 10 周年～その先にお
私たちも地域の皆さんとともに、中山間



やまこし復興交流館が併設される山古志会館



十周年を節目に これからを考える

今年から、中越大震災十周年を一つの節目として復興検証が始まろうとしている。震災に遭遇した「体験」が語られ、復旧から復興へと歩んできたプロセスに皆さんの「教訓」が残されている。その「体験」も「教訓」も伝えられてこそ味を持つ。中越を襲った幾多の災害に対して、また、災いを糧として培ってきた「知見」を伝え情報発信するという意味からも、中越大震災から十年の節目を迎える平成二十六（二〇一四）年は、地域にとっても重要な意味を持つ年である。だが、十年の節目は復興のゴールを意味しているものではない。中越防災安全推進機構では、中越大震災からの復興に携わってきた多くの組織・団体とともに、この急な間を振り返りつつ、十年の節目を次のステージのスタート地点として、被災地域が「さらなる十年のビジョン」を描く支援ができればと考えている。

復興で得た教訓をつなぐ

中越大震災の発生から九年目にして「やまこし復興交流館」が、今年の十月二十三日を目標に整備が進められている。「やまこし復興交流館」の完成によっ

て、すでにオープンしている三メモリアル施設（長岡震災アーカイブセンターきおくみらい・おぢや震災ミュージアムそなえ館・川口ぎずな館）、三メモリアルパーク（妙見メモリアルパーク・木籠メモリアルパーク・震災メモリアルパーク）と繋がって「中越メモリアル回廊」を形成する。「中越メモリアル回廊」にある四つのメモリアル施設は、それぞれの地域の特徴をもって存在し、その運営には地域住民の皆さんとの協働作業が欠かせない。特に「やまこし復興交流館」にあつては、中越大震災発生からの時間軸を振り返りつつ、語るべき「体験」を伝えるべき「教訓」を残していく。そして、それ以上に山古志の「これから」が語られる資料館を目指してゆく。その意味で言えば、地元住民の皆さんと山古志を訪れる多くの来訪者の皆さんが、この資料館を接点として交流しつながつてゆく、そんな拠点施設として存在し続けたいと願っている。中越大震災の復興プロセスから得た多くの「教訓」をもとに、「やまこし復興交流館」から中山間地の「これから」を情報発信していきたい。

（事務局長 山口 壽道）

特集②

「中越市民防災安全大学と市民安全ネットワーク」



安全大学で実施される普通救命講習の様子。
安全士会の応急手当普及部員も講師として実習に加わる。

中越市民防災安全大学とは

中越市民防災安全大学（以下「安全大学」と略す）が今年度も開講した（平成二五年六月二十九日～十一月二日）。安全大学は、中越大震災発生の二年後である平成十八年から、長岡市との共催により中越防災安全推進機構が運営している市民向け講座である。地域の防災リーダーを育成し、市民が地域の防災安全に関する知識と技術を身につけ、災害時に的確な判断と行動ができる市民づくりを担う中核的人材を育成することを目的としている。中越大震災や東日本大震災の発生以降、市民の自助意識の高まりとともに、市民協働による防災活動の必要性も広く認識されているところである。

約五か月にわたる全二六講座では、県内外から著名な専門家を招き、災害のメカニズムなどの基礎知識を習得できるのはもちろん、中越や東日本大震災の経験や教訓、災害時の対応や平時の防災対策についても知識を得ることができる。災害時における様々な防災関連団体の活動についても学ぶことができ、自らの興味の幅を広げることも可能である。入校式および卒業式には長岡市長や新潟県知事による特別講話も行われている。講義は座学のみならず、消防職員による普通救命講習や、ロープワーク実習および消火

練、中越大震災の被災地を巡るツアーなども盛り込まれている。受講生にとっては、防災士試験の受験資格が得られるというメリットもあり、毎年多くの方が意欲的に取り組んでいる。今年度からはテーマに応じてパネルディスカッションやリレートークといった多様な講義スタイルを企画し、さらに受講生にとって多くを学んでもらえるような工夫を重ねている。



安全大学の水害に関する講義中の一コマ。

修了生のその後と

市民安全ネットワークの構築

安全大学では、防災や災害に関する知識や技術を習得したい方、災害時の対処行動について学びたい方はもちろん、地域の防災活動を活性化させたい自主防災会関係者の方々にも、ぜひ受講してほしいと考えている。

安全大学を修了すると「中越市民防災安全士」（以下「安全士」と略す）として認定される。安全士は、卒業後も知識や技術の習熟に努めるとともに、情報を共有し合い、ネットワークを構築することが可能である。年間五十人の卒業生が生まれれば、十年間で五百人の市民安全ネットワークが形成されることになる。また卒業後の進路として、長岡市のまちなかキャンパスで開講されている「まちなか大学院」で学ぶこともでき、自ら防災に関するテーマを設定し、さらなる専門性をのびすこともできる。今年八年度を迎えた安全大学では、これまでに三三五人の修了生を輩出してきた。地域での防災活動は、多くの安全士の活躍によって支えられていることは言うまでもない。

中越市民防災安全士の活動

修了生が築くネットワークとして、卒

業後に入会することができる「中越市民防災安全士会」（以下「安全士会」と略す）がある。安全士会では、会員相互で親交を深め、会員間の交流や地域での防災活動に参画できるような礎を築くことを目的としている。

安全士会では、総務、広報部のほか、応急手当普及部、自主防災会支援部、無線部などにわかれ、市民が担う防災活動の支援体制を築いている。応急手当普及部では、長岡市内のみならず市外への講習にも積極的講師派遣を行い、部内での技能研さんを積むため、月一回研修を行っている。自主防災会支援部は、支援活動の勉強会を行うなど、地域の安全士と共に自主防災会での活動を推進している。無線部は、災害時対応を前提に、定期無線交信の継続と他の無線団体との交流を行い、アマチュア無線資格者への会員募集と指導育成を行っている。また会員全体の取組として、長岡市の総合避難訓練や地域の防災訓練等に参画するなど、地域防災力向上の一端を担っている。東日本大震災の発生以降、中越地域のみならず、東北の被災者も視野に入れた支援活動をも行ってきた。長岡市の体育館に開設された避難所では、福島の避難者から、さまざまな相談を受け付けたり、足湯サービスを行うなど、避難所運営に大きく貢献をした。さらに避難者と長岡市民との交流を図るため、様々なイベン

トを企画したり、平成二四年には震災の記憶を風化させまいと、安全大学受講生と安全士会員を募って東北の被災地へのツアーを敢行するなど、精力的に活動を行っている。

長岡市内の自主防災会組織率は九〇％を超えているが、必ずしもすべての自主防災組織が十分な防災活動をしているとは言えない。一口に「防災活動」と言っても、どんな活動に取り組んだらいいのかわからない地域も少なくないだろう。まずは地域の課題を洗い出し、その課題に照らし合わせ、地域で課題解決の方法を模索することが必要になってくる。平成二五年三月に行われた防災活動事例発表会（主催：中越市民防災安全士会・中越防災安全推進機構）では、自分たちの地域での防災活動のヒントを得るべく、二百名を超える市民が聴講するなど、市民の防災意識は確実に向上していると言えよう。

中越市民防災安全士会では、自らの活動の幅を広げながら、地域防災活動の担い手育成に貢献し、市民によるネットワークを拡大させている。中越大震災発生後から九年目を迎える中、地域の安全士のさらなる活躍が期待される。

（地域防災力センター 関谷 央子）



長岡市南部体育館で福島からの避難者に足湯サービスを実施。



長岡市南部体育館にて。避難所に相談窓口を開設。

シリーズ 人と人

インターンに彼が来てくれると聞いた時は、そりゃ良かったと思った。要はまじめな良い男だ。

家では一緒にNTTの人の説明を聞いてくれて、ネットが通って、フレンドシップの活動も見られるようになった。畑で仕事を教えていても、通りがかった村の人に声を掛けられる。ラーメン食べに連れて行ってもらって、夫婦の間に挟まれて息子みたいになってるしな。村の人達に可愛いがられてるよ。

1年間彼は木沢に居るけど、木沢だけしか知らないのではもったいない。川口全体、よその事も知ってほしい。彼の本来の使命は先生になることだから、しっかり勉強して、暇な時は田畑をして山の生活を知ったり、ばあちゃんの話聞いたり。それで見識が広がるということもある。ここでの生活が肥やしになればと思うよ。

木沢には良い景色があって、名物野郎たちや、耍みたい人も居るんだって大いに発信して行ってほしい。

小林 正利

長岡市川口木沢集落在住。木沢集落の地域づくり団体「フレンドシップ木沢」会長。「やまぼうし」の運営の他、地域資源を用いたイベント活動など様々な団体活動のまとめ役をしている。高橋さんの耕作体験の「監督」でもある。

高橋 要

山形県生まれ。今年4月より長岡市川口木沢集落の地域づくり団体「フレンドシップ木沢」でインターンを開始。廃校になった小学校を利用した宿泊施設「やまぼうし」で生活し、集落の情報発信等に取り組んでいる。

「地域に惚れ込んで
芽生えたつながら」

3年前、大学院の先生に同行して木沢に入ったのが最初の機会です。木沢を好きになったのは、ベタだけど「人が良い」から。山や景色も最高だけど、集落のどこへ行っても受け入れてもらえる気風があったから、抵抗なくインターンに入りました。宿舎にはお風呂が無いので、それを知ってか「風呂入ってけ」と声をかけてもらったり。

正利さんは大胆不敵な印象があるけど、実は大事な細かい部分も見ていて、話が煮詰まっている時など、正利さんの発言で場ががちっと固まる。本当に凄いなと思って見えています。

自分は1年間しか居ないけど、次につながるような物を残していけたらと思っています。木沢を支える地域復興支援員の代わりにはなり得ないけど、橋渡しをする細かい部分を手伝えたらと。

ここにいると色んな機会が回ってきて、繋がりが出来る。木沢に居ながら外と同時に関わることで、また新しい木沢が見えてくる。

「勇気くじきとエンパワーメント」

地域防災力センター チーフコーディネーター 河内 毅

一年ほど前からコーチングを習い始めた。きっかけは被災地で支援活動をしている中での人間関係。思い返すと過去にも似たような経験があったわけで、ひよっとしたら自分自身に問題があるのではと思ったことがコーチングを学び始めるきっかけだった。コーチングとは、対話等を通じて相手の想いを引出し、それを実現するための手伝いをするものである。この中に支援活動などを行っていく上で大切だと思われることを多く学んだのでこの場を借りて少し記してみたいと思う。

「勇気くじき」ーコーチングで学んだ概念である。例えば、子どもが自ら進んで親の手伝いをしようとしたのに、親から「そんなことは良いから勉強しなさい」と、せっかくの善意を無駄にされてふて腐れてしまうなんてことがあるが、この状態が勇気をくじかれた状態である。性善説によれば人は善意によって行動するが、勇気をくじかれることによってそれ以降の行動や思考が良くない方向に変わってしまうことがある。ただ、その結果よりもむしろ勇気をくじいてしまうその過程に問題がある。そんな視点で見ると社会には「勇気くじき」の要素が多分にある。自分自身のことを省みてもこれまで多くの「勇気くじき」をしてきたと改めて反省させられる。例えば、復興支援の現場で活動について協議する際、相

手の話を最後まで聞かずに「でも、今は〇〇をやるべき」と活動を断じてしまうなど、知らず知らずのうちに相手の「勇気くじき」をしてしまっていたことも多かった。

災害支援の現場においては、必ずしも支援活動の正解が一つでないために、支援に対する考え方の違いなどから支援者間で意見が対立し、互いに「勇気くじき」をしてしまうことも少なくない。また、周囲に矛先が行くばかりでなく、自分の思い通りにすることの出来ない自分への苛立ちから自分自身の勇気をくじいてしまうことも起こり得る。

では、「勇気くじき」をしないためにはどうしたら良いのだろうか。一つは相手を尊重した上で話を最後までしっかりと聞き、相手の真意を確認してから自分の意見を述べて議論することである。こう書くと、そんなことは出来ていると言われる方が多いと思うが、意外と相手の発言の真意まで確認できていない場合が多かったり、表面的には肯定しておきながらも「でも…」と相手に自分の考えを押し付けている場合も多かったりする。自分で、注意してみても頂けたらと思う。自身「勇気くじき」をしないことも大切である。そのためにはまず自身自身を認めてあげることである。私たちは習慣的に反省することに慣れていて、目や

きがちで、自分の活動を過小評価したりダメ出しをしてしまいがちである。しかし、視点を少し変えてみると、出来ていることやチャレンジしていることは沢山あるもので、そういったことに目を向けることが自分を評価することにつながる。それを評価して次のステップに向かって行くことが大事である。ただ、自分自身の出来たことに焦点を当てるのは思ったよりも簡単ではないので、他人に自分の日々の活動を評価してもらうことも時には必要である。たまには互いの良い所を出来ているところを探し出して、褒め合うような時間をあえて作ってみても良いのかもしれない。

「勇気くじき」とは反対に、自分や相手を認め、それを勇気づけて背中を押してあげることが、これすなわち「エンパワーメント」であろう。我々は地域に対しては「エンパワーメント」の意識を常々持っているが、支援者自身や仲間内に対しても「エンパワーメント」の意識をもっと持つべきなのかもしれない。



【全国植樹祭イベントが行われました！】

6月16日(日)川口きずな館周辺で、全国植樹祭イベントが行われました。天皇皇后両陛下がお出でになり、1年後の本番へ向け大会の開催気運を高めるため、両陛下への歓迎の気持ちを綴ったカードを付けた風船を空に放ちました。会場では地元飲食店等の屋台も出店され、大いに盛り上がりました。



【夏休み企画展「防災グッズの今と昔」を開催します！】



きおくみらいでは、「防災グッズの今と昔」展を開催します。戦災時～現代までの防災グッズを展示するとともに、実際に防災グッズを持ち出し袋に詰める体験コーナーを設置。8月11日には非常食の試食会も実施します！詳しくはHP (<http://c-marugoto.jp/nagaoka/>) をご覧下さい！

【「防災そなえチャレンジ～2013夏～」を開催します！】

そなえ館ではGWに実施した「防災そなえチャレンジ2013春」が夏バージョンになって再登場。好評を博したプログラムに加え、夏限定のアウトドアプログラムも新登場。「そなえ」について普段から考えておくことが、「イザ」というときの大きなチカラに！さあ、家族やお友達と楽しく学んでそ・な・えましょ！

「コラム・視点防災」

【長岡まつりと防災】

今年も早いもので、もう夏を迎えました。夏といえばおまつりと花火ですね。

中越防災安全推進機構のある長岡市では日本三大花火大会にもなっている「長岡まつり大花火大会」が開催されます。長岡まつりは、昭和20年8月1日長岡空襲から1年後の昭和21年8月1日に開催された「長岡復興祭」が始まりです。あれから、67年、その後も中越では復興のシンボルとして親しまれてきました。

さて今回は、長岡まつりの「翌日」に注目します。長岡まつりの翌日8月4日には毎年早朝から、ゴミ拾いなどの清掃活動を実施しています。この清掃活動には子ども達から大人まで数多くの方が参加しており、長岡まつりを支えています。花火大会が復興のシンボルであると共に、皆さんの「長岡をよくしたい」「きれいにしたい」といった想いも、同じ様に復興シンボルになっていますね。
(復興デザインセンター 日野 正基)



会員募集中！

当機構では私たちを応援してくれる会員を募集しています。
地域防災への取り組みや被災地への支援活動に賛同し、応援いただける会員を募集しています。
正会員：年会費5,000円/年
団体賛助会員：100,000円/年
個人賛助会員：3,000円/年
※申込書は当機構ホームページよりダウンロードできます。

施設のご案内

長岡震災アーカイブセンター
きおくみらい

【住所】
〒940-0062
新潟県長岡市大手通2-6
フェニックス大手イースト2階
【開館時間】
【入館無料】10:00～18:00
【休館日】
毎週火曜日 年末年始
【TEL】
0258-39-5525
【FAX】
0258-39-5526
【e-mail】
kiokumirai@cosss.jp

おぢや震災ミュージアム
そなえ館

【住所】
〒947-0026
新潟県小千谷市上ノ山4-4-2
小千谷市民学習センター「楽集館」2階
【開館時間】
【入館無料】9:00～17:00
【休館日】
毎週水曜日 年末年始
【TEL】
0258-89-7480
【FAX】
0258-89-7485
【e-mail】
sonae@cosss.jp

川口きずな館

【住所】
〒949-7503
新潟県長岡市川口中山144-1
川口運動公園内
【開館時間】
【入館無料】10:00～17:00
【休館日】
毎週火曜日 年末年始
【TEL】
0258-89-3620
【FAX】
0258-89-3621
【e-mail】
kawaguchi-info@cosss.jp

ながおか市民防災センター

【住所】
〒940-0082
新潟県長岡市千歳1-3-85
ながおか市民防災センター2階
【開館時間】
【入館無料】9:00～18:00
【休館日】
年末年始
【TEL】
0258-39-5525
【FAX】
0258-39-5526
【e-mail】
info@c-bosai-anzen-kikou.jp

やまこし復興交流館
準備室

【住所】
〒940-0204
新潟県長岡市山古志竹沢甲1377
山の学校(通称ロータリーハウス)
【TEL】
0258-41-1203
【FAX】
0258-41-1204
【e-mail】
memorial@cosss.jp